

青年のアイデンティティ・ステイタスと家族システムの分化の関連

— 高校生とその両親を対象とした質問紙法による一考察 —

奥野 光

<問題と目的>

青年期の課題として、親から心理的に分離し、自立していくことが指摘されてきた。この「個体化」のプロセスについて、個人発達理論からは、個人の原家族からの分離、心理的な自立という視点が強調されてきた。しかし、年齢相応の分離を結び付きの中で達成していく(Youniss, 1983)という側面が指摘され、また家族システム論的アプローチから、情緒的安心感が基盤として存在し、愛情や親密性があることの重要性が主張されるに伴って、青年の個体化のプロセスと、家族システムの相互性に注目する必要性が論じられるようになっている。青年期の個体化の過程は、同時に家族がその関係の変容を迫られ、一体感と分離のバランスを新たに模索する過程である。そして、家族は、単に成員が所属する静的な環境ではなく、積極的に成員に対して働きかける生命力のあるシステムであると考えれば、家族システムと青年の発達の相互作用的側面に接近することが必要となる。

そこで本研究では、青年期の個体化の最も重要なサブプロセスであるアイデンティティの探索に焦点を当て、Marcia (1966) のアイデンティティ・ステイタスという概念から青年の発達の一側面を捉える。そして、個体化に影響を与える家族システムの特性である「分化(differentiation)」という視点によって、青年と家族システムの相互性にアプローチする。

「分化」とは、原家族において、個人が、情緒的に結ばれているという感覚をもちながら、同時にそれぞれが分離した感覚を維持できるような家族内のかかわりあいを表わす概念で、家族レベルの変数である。よりよく分化した関係には、分離と結び付きの年齢に合ったバランスをとるように促すようなかかわりのパターンがある。家族システムが分化していれば、つまり、家族が愛情や支持に満ちた安心感のもてる基盤としての役割を果たすと同時にそれぞれの個性を許容し、自立を励ますシステムであれば、青年は、年齢に相応した、目標のある課題に安心して取り組むことができると思われる。したがって、家族が分化している、ということは、社会や環境の変化、家族成員個人の発達のな変化、そして家族全体の発達による変化に対して適応していく能力となり、アイデンティティを発達させていく青年を抱える家族にとっては特に重要な変数となると考えられる。

そこで、本研究では、①アイデンティティ達成にある青年の家族は最も分化しており、早期完了、積極的モラトリアムの青年の家族も、拡散にある青年の家族より全体として分化しているという仮説をもち、ステイタスごとに分化度を比較検討した。さらに、②どの関係性(父子・母子・夫婦)の分化が青年のステイタスと関連しているか、そして③成員内、成員間の分化度の認知にずれがあるか、あるとすればそれが青年のステイタスと関連しているかどうかを探索的に検討した。

<方法>

高校生とその両親を対象として質問紙調査を実施。高校生は、公立高校普通科、工業科の生徒で、計184名(男子121名、女子63名)。高校生が学校で自身の質問紙に回答したのちに両親用の質問紙が家に持ち帰られた。質問紙の内容は以下の通り。

- ①分化度：対象は高校生とその両親。家族システムの分化尺度(DIFS)(Anderson & Sabatelli, 1992)を本研究者が翻訳し、予備調査を経たもの。ある成員から他の成員への関わり方を尋ねる質問が、家族内の様々な二者関係について11項目ずつで、計66項目。
- ②アイデンティティ・ステイタス：対象は高校生のみ。Marcia 法を質問紙化した加藤(1983)のアイデンティティ・ステイタス尺度。「現在の自己投入」、「過去の危機」、「将来の自己投入への希求」の3つの下位尺度(各4項目、計12項目)から成り、ステイタスはそれらの得点によって流れ図式に決定される。

<結果と考察>

1. 高校生のアイデンティティ・ステイタスについて

人数に偏りが見られ、D-M中間にある高校生が非常に多く、高校生である青年たちは非常に不安定な状態にあることが分かる。また、「過去の危機」尺度の信頼性が非常に低かったため、該当人数が少なく、過去の危機の得点によって区別される達成、早期完了、そしてその中間のステイタスを合わせて達成群とし、表1のように4ステイタス間で検討することとした。よって達成群は、過去に自分について様々な選択肢を並べて悩んだり、重大な決断をした時期があるか否かについては幅があるが、現在は積極的に物事に関与し、目標をもって努力してい

表1 高校生のアイデンティティ・ステイタス

修正前	人数	修正後	人数
達成	9	達成群	31
A・F中間	8		
早期達成	14		
積極的モラトリアム	12	積極的モラトリアム	12
D・M中間	112	D・M中間	112
拡散	28	拡散	28

る青年のグループとして捉えられる。

「危機」の経験がアイデンティティの探索過程に必ず伴うとは言い切れなくなっている現状も示唆されただろう。北村(1983)が「消極的アイデンティティ」という概念を示し、危機を経ることなく受動的に作り上げられるアイデンティティを指摘したように、現代の大人になる難しさは、青年自身の危機を経ることの難しさ、社会や学校、家族システムが危機にある青年を支えることの難しさを象徴しているのではないかと考察された。

2. 青年のアイデンティティ・ステイタスと分化度との関連について

各ステイタスごとに分化度について一元配置の分散分析と多重比較を実施したところ、家族が分化していることと、青年のアイデンティティの探索に見られる個体化のプロセスとは相互に関連していることが示された。まず、達成群と積極的モラトリアムにある青年は、拡散にある青年よりも、家族を分化したものであると認知していた。達成群は現在積極的に自己投入を行なっているグループ、積極的モラトリアムは、現在とはともかく将来に対して期待しており前向きな展望をもっているグループである。この両ステイタスは、アイデンティティの探索の状態としては安定しており、青年にとって家族が支持や共感があり個別性を尊重し合うものとして体験されているようである。また青年、父親、母親三者の分化度を合計して検討すると、達成群の青年の家族の分化度は、D-M中間や拡散の青年の家族のそれよりも有意に高かった。現在あるいは将来に対して目標をもち安定していれば、青年は分化した家族を体験できると思われるし、逆に家族も青年に対して支持や励ましを与えやすい。一方拡散にある青年を抱えた家族では、全体として分化度が低く、青年にとって、家族は安全な基盤としての役割を果たさず、家族も不安定な青年に対して対応が難しくなるといった相互性が明らかとなった。

3. 夫婦関係の分化について

達成群の夫婦サブシステムは他の3つのステイタスよりも有意に分化した関係にあり、夫婦が分化した関係にあることが、青年の発達に促進的に関わっていると言えるようである。青年の問題で来談するケースに、夫婦関係の葛藤やもつれが認められる、といった臨床的知見を支持する結果が得られた。また、両親どうしの体験だけでなく、青年にとって両親の関係が分化したものとして体験されているかという問題も重要であった。夫婦関係が、互いに支持し、個別性を尊重し合う関係であることと、その子どもである青年もそのようであると感じられることは、青年の現在のアイデンティティの探索や個体化のプロセスだけでなく、彼らの対人関係の持ち方や将来の夫婦関係にとっても非常に大切なことだろう。夫婦関係が家族の基盤として非常に重要であることと共に、夫婦関係を視点とした臨床的接近の可能性が示された。今後の研究の視点としても興味深い。

4. 分化度のずれについて

成員個人が認知する様々な関係性の分化のずれの大きさと、青年のアイデンティティ・ステイタスとの関連は見られず、各関係性の分化度は、むしろ類似していた。これは、全体としての家族の体験と、各成員との関係の体験が相互依存的であるためでもあろう。また各家族成員の分化度は類似しており、特に母子間ではそれが顕著で同じような家族を体験していることが分かるが、積極的モラトリアムの青年と父親では、家族のかかわりの認知に齟齬があることがうかがえた。どの家族にもユニークな関わり合いのパターンや構造があり、それが必ずしも青年のアイデンティティの発達の状態によって分けられるものではなかったのかもしれないが、支持や共感、個別性の尊重など、多義を含んだ分化という概念で、質問紙によって家族内の二者関係の関係にアプローチするには、制限も大きかったと思われる。

5. 「分化」についての今後の展望

最後に、分化という概念の意味、そして家族の有り様は、文化によって規定されるところが大きいだろう。今後、尺度の再検討も含めて、我が国において、分化しているということ、分化していくということをどのように取り入れていくことが可能か、検討していきたい。